

「意味づけを変えられるか 一可哀そうな存在ではなく」

小中高校生の吃音のつどい代表 <https://kitsuon-tsukiau.org/>

跡見学園女子大学大学院臨床心理学専攻修士課程修了

令和8年度 跡見学園女子大学心理教育相談所インターン 佐藤隆治

はじめに

先生方、ひょっとすると、吃音の子供達をとっても可哀そうとお感じになられて、吃音を治してあげよう、軽くしてあげよう、改善してあげようとお考えかもしれません。「軟起声」という最初にふわっと優しく声を出す等、私や仲間が行ってはきましたが、一時的な改善効果しかなく、持続性が無い。Sustainableなものではなかったです。吃音問題の解決の鍵は、吃音の受容、即ち自分の吃音の事実をあるがままに認める、そしてその吃音と共に生きていこうという将来像をこれから描いていこうという思いを持つ事だと思います。今日は小学校の時の話もしますが、それ以降の話が多くなります。吃音受容に辿り着くためには、小学校の間、どのような事を子供達ができていたらいいか、という点をお考えになられながら、お聞きいただければと思います。

どもり始めた頃

ONCE UPON A TIME. 大阪の天王寺という所に、玉のような男の子が生まれました。友達と遊んだりするよりも虫を捕ったり、動物と遊んだり、植物を育てたりが好きな、無口な男の子でした。学校にうさぎ小屋があり、小学4年の日曜日、世話をしに行きました。

佐「今日、うさぎの赤ちゃん生まれてたりするかなあ？そや！T君、うさぎにあげる（苦しそうな難発の後）……クククっさ、校舎の裏に取りに行けへんか？」

T「え？佐藤君一体どないしたんや？うさぎにあげる草やろ？なんでそんな突然、声出えへんようになったんや」

私自身も、ちょっと怖かったですね。友達と喋ってる時に、突然声が出なくなった。

月曜日の算数の授業です。「この問題分かる人、手挙げて」。私は分かるので「はい」って、手挙げますが、その時に「ひょっとして、クラスの皆の前で答える時、昨日のうさぎ小屋の時みたいに声出なくなったら、どうなってしまうかな？」と、モヤモヤとした予期不安が生じます。そういう時に限って「はい、佐藤君」と当てられるものです。案の定、「エエエ…（円周率と言いたかった）」と、皆の前でどもり始めると、「ガハハハハハ」とどっと笑い声。

「これっ！笑うもんじゃない！」クラス担任は、パッと制止してくださいました。良い先生でした。予想せぬ事が眼前に現れると、つい笑ってしまうのは、子供達にとってごく自然な反応でしょう。笑うほど面白くもなり、雪だるま式に、笑いが笑いを呼ぶ。「笑っても良いのか？」と勘違いしてしまう子供もいるかもしれない。ことばの教室の先生方は、クラス担任に「そういう時はパッと制止してください」と、コンサルテーションしてあげてください。

そういう事でどもり始める、吃音の問題になり始める事がありました。

中学生時代と合理的配慮について

中学1年の後期です。私はやりたくはなかったんですが、学級委員に選ばれてしまいます。

担任「じゃあ、秋の文化祭。このクラスでどんな出し物したらいいか、この学級会の時間、話し合って決めたいので、学級委員2人前に出てきて司会進行してください」

佐「司会なんてうまくいくかな？」

委員は、私男子1人、女子1人。そこでもう一人の女子に、

佐「田中さん、僕ちょっとどもるでしょ。黒板に書く板書係と司会、代わってくれへん？」

田「何言うてんの！佐藤君。板書するのは女の子の仕事で、司会するのは男の子の仕事やないの。アホなこと言うたらアカン」

佐「（仕方ないな）アアア…秋の文化祭ですけど、このクラスでドドどんな事したらええか、みんな意見あったら言ってください」

意外と結構、特に女子が手挙げて意見出してくださいました。「うちのクラスこんな事やったらいいんじゃないですか。こんな事やったら」って、ありがたい事に。でも、どもり・どもりしながら、司会続けるのはちょっとしんどい…。クラス担任は教室の一番後ろで、黒板に背中もたれかけて、進行ぶりを見ている。そこで私はその先生にテレパシーを送りました。

佐「先生。ちょっと司会が全然進まないんですけど。どもりどもりで。今日はもうちょっとこの辺で勘弁させてもらって、そろそろ先生代わっていただけませんか？」

すると矢のように、テレパシーが、先生から返ってきました。

担「いや、佐藤。良いんだよ、それで良い。時間かかるのは構わないから、やれるところまでやってみい」

佐「（仕方ない。じゃあやるか）（改めて前を向いて）イイ色んな案が出ましたが、ココこの中からドドどの案が良いか、それぞれ案、出してくれた人に、もう一度説明してもらって、多数決しましょう」

当時、学級崩壊は無かったのですが、その代わり、ちょっと不良っぽい子とか、家庭に問題があるのか？暴力振るいがちな子とか

いました。不登校という言葉の代わりに、登校拒否という言葉があり、あまり学校に行けてない子もいた。どもる佐藤が、前に出て汗水垂らして、司会進行するのを見て共感してくれたのか？あるいはあいつ頼りないから、協力してやらな、あかんなという感じからなのか？大勢が集中して取り組んでくれました。不良っぽいと言う言い方は良くないのかもしれませんが、そういう子達も積極的に取り組んで、結果的に良い文化祭になりました。

今思うとですが、逃げなくて良かった。多様な価値を持つクラスメイトが、ダイバーシティの形で生み出した、インクルージョン教育の一形態に出会っていたのだと思います。私にとって、良い人生経験・自信となった。合理的配慮という言葉がありますが、もしこの時、「佐藤どうする？」とただ聞かれたら、「配慮してください」と言っていたかもしれません。ですので、しっかりと対話すること無く、物分かり良く？配慮するのは、私は良くないと思います。どこまで頑張れそうかを対話して、「できるとこまでやってみよう。後は先生がフォローする」との信頼関係を基に、まずは背中押してあげるのが教育ではないでしょうか。安易に断るような習慣を身につけてしまうのは、どうかと思うのです。

大学生時代の落語研究会での気づき・学び

1. 向かっていくべし…しかし過去の蹟も記憶に有り

大学へは一浪して、です。浪人は苦しかったので、京都の大学、入った時は嬉しかったです。京都は盆地です。また碁盤の目の街並みの向こうに、山がすぐ近くに見えるような所もございます。あれ大文字かな？てなもんですね。さあ、ここで4年間勉強して社会に出るんだ……うん？？でもこの吃音の私が、社会に出られるだろうか？うーん、出れそうな気なんかしない。（考える）そうや、受験する前、大学入ったら、落研（おちけん）、落語研究会やってみよかなって思ってたんやな。そや、落研入ってみよか。本読みは好きで得意でした。

でも高校時代、「私はどもりです。どもりを治す練習をしています」と書かれたプラカードを首からぶら下げて、商店街歩いたり、大阪の環状線の中で吃音治す目的の弁論練習したけども、いくらやっても治らんかった。矯正所の先生は、最初の言葉を「ふわっ」と言い始める「軟起声」が最先端だと言って教えてくれたけども、ちっとも効果無かったよな。

2. 人一倍、いくら練習しても…

落研入って、他の部員の2倍5倍10倍練習したら、どもり治るか治らんかはっきり分かるやろ。もし治らんかったも、どんな心持ちで社会に出て行ったら良いのか、そんな答えが見つかるんじゃないかと、清水の舞台から飛び降りた。

先輩「お！新入部員か？」

佐「はい、そうです」

先「新入部員、来てくれてうれしいな。そこのお座布座って。はい。これから入部面接を始めます。入部動機は何ですか？」

佐「出身は大阪堺市で、土曜日とか、吉本新喜劇見たりお笑い好きで、落研入ろう思いました」

先「ああ、そうか、なるほどな。じゃああなたの趣味、あるいは苦手な事は何ですか？（いくつかのやり取りの後）はい。入部を認めます！」

佐「はあ良かった。入部できた」

先「でも、えらいどもり癖のひどい人が入ってきたなあ。大丈夫かな。じゃあ、小唄一つ教えますから、聞いててよ。『イタリアのローマ法王がデコピンをした時の音です。バ・チ・カーーン』（笑い）ちょっとこれ、やってみ」

佐「（こころの声：何やこれ、アホみたいやな）ローマ法王がデコピンをした時の音、バチカーンですか？」

先「そや。今度の新入部員歓迎寄席で、一回生は小唄だけやけどな、出るねん。これやってみなさい。芸名は丸八でええねんな」

丸八「えー道楽亭丸八（まるはち）と言います。これからどうぞよろしくお願ひします。『イタリアのローマ法王がデコピンをした時の音です。（こころの声：さあ、ここで受けるぞ）デコピンをした時の音です。（大きな難発で始まり、連発に移行しようとするが、連発のまま）…バ・バババチッ…』」

客1「（最前列のお客さんが隣の友人を肘でつついて）ちょっとあんた、この人えらいどもってのはるけど、（首をひねって）ここでひょっとして（さらに首をひねって）『バチカン』って言いはるんと違うか？」

客2「ああ！『バチカン』ね」

丸「そこのお客さん。ネタ言うたらアカン。言うたらアカン。（悲哀こもって）『バチカーーン』」

3. 先輩・同輩・後輩からの精神的ソーシャルサポート（治ってなぞいないからこそ…）

落研のボックスです。普段練習したりする部室ですね。

天海「ああー痛い、痛い、痛い」

丸「あれ？天海（てんかい）さんどうしたんですか？」

蝶飜「いや、丸八。そっとしといたげて。丸八知らんかもしれんけど、天海二回生やけど、ほんまやったらもう五回生なんや。実

は3回留年しててな、この前、九州の親から電話かかってきて、『お前いつになったら大学卒業すんねん。ええ加減にせんと仕送り止めるぞ』と、親からどなられて、それ以来、急性顔面神経痛や」

天「(苦しそうな声で)丸八お前な。落研やめたい思ってるかしれんけど、やめたらあかんぞ、丸八。この前の寄席の新入部員紹介、『立て板に水』と言うよりも、お前『立て板に鳥餅』やったな。一言しゃべるたんびに、どもりどもりで。そのどもるたんびに、KJ大学の落研の女子がもうゲラゲラ笑ってたけどな。ようお前、最後まで自己紹介やり通したな。俺な、あの時、どえらい根性ある新人が入ってきたな思って、感心したよ」

丸「まあ、感心した言われても、私あの時、あれで精一杯やったし。これからどない、落研やっていったら、ええんですかね？」
蝶「丸八なあ、丸八が落研入ったのは、その何て言うか、あのなあ、なかなか声が出ないと言うか、そのどどどもると言うか。言うてしてもた。それをなんとかするために落研に入ってきたんやろ。お前ここでやめてどないすんねん」

4年間やめずにいました。人の何倍も練習しましたが、治るという事は無かった。入部目的の答え一つは出ました。落研言うたら喋るのがうまい口八丁、おもしろい連中ばかり。一方、私は、高座で吃音出して喋りますし、吃音は治ってなぞいない。しかしそんな先輩・同輩・後輩の中で揉まれて、そして楽しくやっていたのが分かったのが、実に良かった事です。

結婚の前に (スティグマ vs 自己効力感)

浮いた話になりますが、ごめんなさい。うちのかみさんと出会った時の事です。日曜日、電話かかってきました。

妻「あの佐藤さん、今日、上野にね、うちの母がたまたま来るから、ちょっと夜、食事で会ってくれませんか？」

佐「えらい、いきなりやな。まだ正式にプロポーズもしてへんのに、そんなの会える訳無いよ」

妻「今日来ますから、〇〇時に上野に来てくださいね！（ピシャリ）」

仕方ない。行きました。初めて向こうのお母様にお会いする。これまでにないくらい緊張します。

佐「サッ、サッ、サッ、、、佐藤隆治(たかはる)です。〇〇さんには、トトとてもオオお世話になっています(フウッー)」

食事は無事に終わり、その晩、彼女から電話がかかってきました。

妻「佐藤さん、突然呼び出して悪かったわね。でも、よく来てくれたわ。ありがとう。それでね、うちの母親ね、あの後、私に言ってたんだけど。『お前、あんなどもりひどい人と一緒になって、ほんとに大丈夫か？』って。アハハ…ハ。そんな風に言われたわよ」

私の妻は、その時、そういう事を母親に言われて、「アハハ…」と笑い返す事ができていました。これ、「愛はどもりに勝つ」とかを、言いたい訳じゃ無いです。どもる事は間違いなくどもる。別に治ってなぞいない。しかし吃音であっても、どうにかこうにかでもして、なんとかやっていたらという(自己)効力感が、妻にはしっかりとあった。「吃音だったら、この人ダメ」という Stigma (スティグマ) に、大人の人ほど染まっていたりするのですが、妻は「私の彼はどもりますけど、それがどうかしました？お母さん」ぐらいな感じでいてくれてた訳ですね。もちろん私自身も、自己効力感 (Self-Efficacy) 持っていました。得意な事はあるし、色んな仲間もいる。

社会人 新人時代の電話 (仕事に、真摯に愚直に向き合う末に…)

新人時代、仕事するにはほとんど電話です。当時メールなんてないですから。まあ、今でも電話できないとダメでしょうが。電話します。(ダイヤル回す動作して)

佐「ホ、ホ、ホ、、、ホホ本田技術研究所の佐藤です」

鈴「はい。〇〇会社の鈴木です。本田技術研究所の佐藤さんですね」

佐「ハハハ8月〇日に打ち合わせしたいと思いますが、弊社までお越しいただく事可能でしょうか？」

鈴「はい分かりました。伺います」

打合せの後日、(ダイヤル回す…)

佐「ホ、ホ、ホ、ホ、、、本田技術研究所のササ…」

鈴「あの失礼でなければよろしいのですが、本田技術研究所の佐藤さんでしょうか？」

佐「はい、そうです。佐藤です。よろしく願います」

また後日、(ダイヤル回す…)

佐「ホ、ホ、ホ、ホ、、、本田技、ギ、ギ、ギ技術研究所の。あのあ」

鈴「ひょっとして、本田技術研究所の佐藤さんでしょうか？」

さらに後日、

佐「ホホホ、本…」

鈴「本田技研研究所の佐藤さんですね？」

佐「(ちょっと今日は調子悪いかも？でも電話するしかないなあ) (ダイヤル回す…) HHHH…」

鈴「本田技術研究所の佐藤さん？」

佐「ひええ！息だけで分かっちゃった！でも考えてみたら、なんや便利なもんやな」

注：丸八、天海、蝶飜：落語研究会での芸名。部員は在学時（卒業後も）、本名ではなく、全て芸名で呼び合うのが習慣。

全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会主催「はじめのいっぽ2025 卒業生に学ぶ 吃音」にて発表した（2025年8月6日、於国立オリンピック記念青少年総合センター）ものに一部加筆。全難言協機関紙第44号『きこえとことば』にても紹介。